The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳五十年
Author(s)	木村, 英一
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 1-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德五十年

木村英一

論語の里仁篇に、「君子は德を懷ふ、小人は土を懷ふ」とある。これが懷德堂の名が由來する典據であることは言うまでもない。解釋の說はいろいろあるが、農夫が土地を大切にするように、教養人は德を大切にせねばならぬ、という意味に受けとれる。君子というのは、古くは、社會的な身分から言えば、爲政者、指導者の階級に屬する人を意味するが、同時に人間の內容としては、その樣な地位に立つにふさわしい人格と教養とを備えた人物を指し、言わば社會のエリートである。德とは古來、「德は得なり」と言われ、人間が身につけている性質を總括して德と言う。その人が現に身につけている性質の中には、先天的に得ている生れつきの性質もあるし、後天的に學習や修養の結果として獲得したものもある。先天的に得ている性質を性と言い、後天的に習得したものは教養であるが、これ等の兩者を含めて、その人のもってゐる性質の全體を德と言う、と理解してよい。もっとも性質には善いのも惡いのもあるから、惡德という言葉もあるが、普通にはただ德と言えば主として善い性質を指すのが慣例で、善い性質を多く身につけている人を有德の人という。農夫が土地に深い愛着をもっているごとく、教養人は德に深い愛着をもつ。職業の如何を問わず德に深い愛着をもつ人こそ教養人である、——これがこの言葉の時代を越えて通用する意味である。

江戸時代に設立された幕府や諸藩の學校は、當然、爲政者としての武士を養成する機關であったが、その中に伍して大阪の懷德堂は、町人ながらも教養ある人物を養成しようとした特異な存在であった。そして萬人が齊しく教育を受くべき權利をもっているという今日の考え方からすれば、これは幕藩體制下において發生したところの、教育意識

の上にあらわれた近代化への一萠芽であったとも言えよう。ともかくこの精神は、維新以後の近代大阪に無形の影響を與えて存續したものである。

維新の改制によって、舊い形式をもつ懷德堂は閉鎖の運に遭つたが、明治末年に至って、懷德の精神は識者の想起するところとなった。懷德堂記念會が結成されて、新しい時代の風潮に適合した形態を工夫しながら、講義を再開するに至ったのがそれである。爾來、今日に至るまで五十年の歳月を經過したが、その間、學界・財界の有識者の協力によって、時勢の變化に應じた適切な運營が行なわれ、多くの成果を擧げて來た。

大正五年に講義が開設されてから今年に至るまでの五十年間は、大きく二つの時期に分つことができる。第一期は開講より昭和二十年の戰災による講義の中斷までの三十年間であり、第二期は終戰後の昭和二十五年に講座が開設されてから今日までの十六年間である。第一期には、懷德堂專屬の講堂・圖書館等をもち、專任の教授を聘し、また絕えず多數の講師を囑託して、定日講義・日曜講義等を間斷なく行なって來た。これは大阪の地に未だ文科系大學の存在しなかった狀況において、能く一部市民の要求に應えることができて、それなりに社會に貢獻するところがあった。但、大戰の時期は諸事不自由をきわめたが、最後まで努力して屈することがなかったのは、我々がいささか省みて自らなぐさめるに足るものがある。しかし昭和二十年の戰災は、一朝にして講堂を烏有に歸し、また教授講師の多くは凋落せられて、終に講義を中斷するの已むなきに立ち至った。この狀態に直面して、當然、善後策が考究されたが、戰後の窮狀と社會の變貌とに鑒み、燒失をまぬがれた圖書資料を擧げて大阪大學に寄贈すると共に、今後の事業は阪大文學部と共同して行なう、という新方式が打ち出された。そして昭和二十五年十一月に阪大主催の懷德堂記念講演會が開かれ、翌二十六年から、毎年、春秋二季に、それぞれ一週間づつの懷德堂講座が、阪大との共催によって行なわれることとなった。これ以後が第二期である。最初、講座が計畫された時は、當時の窮迫した戰後の狀況下において、取り敢えず實現可能の事業で、しかも將來性をもつものとして、これが採擇されたのであった。それが今

や十五年三十回を重ねて、ささやかながらも安定した一つの文化事業であることを實證し得たことは、御同慶にたえない次第である。しかし懷德堂記念會の今後の事業は、必ずしもこれだけに止まるものではなかろう。事業の今後の發展は、關係者の今後の善謀と努力とにこそ俟つべきであろう。

およそ教育と修養との事業は、人類永遠の課題である。一方には科學・技術の日進月歩の發達があり、社會生活に絶えず變化があって、我々は時々刻々にそれに適應してゆかねばならない。しかし他方においては、何時如何なることに當面しても、それに影響されて起り勝ちな人格の偏向を避け、人間として正常なバランスのとれた安定性を建立しなければならない。この努力は、寸時も休むことなく、しかも人類が存在する限りは續けねばならぬ筈のものである。けだし教育と修養との事業は、このことに關わっている。近頃、一部には、科學技術の急速な進歩と連關して、産學協同の聲を聞くが、今われわれの意圖するところは、技術教育という如き狹い範圍に限定されるものではなく、また資本家の資本にも、一部學者の偏った學説にも支配されるものではない。財界人たると學界人たると、その他如何なる職域に屬する人たるとを問わず、すべての有志にとって極めて自由で親密な話し合いの場を築いて、そこで相互に切磋琢磨を助け、また何程かでも社會に役立つ文化事業を行なおうとするに在る。既に我々がここ十五年來行なって來た講座は、阪大文學部との善意と良識によって結ばれた共催事業である。ささやかながらこの精神の萠芽として、今後に一層の發展を期したい。

とどまるところを知らぬ機械文明の急速な發達は、産業・交通・通信をはじめ、家庭内における料理や洗濯に至るまで、必要に應じてますます能率的な處理を可能にした。それに對應してあらゆる事業の規模がいよいよ大型化する傾向に在り、教育と研究との機關である學校もまた、續々とマンモス化するものが現われている。これはもとより時代の要請が然らしめるところで、そこには人材の大量生産と能率的な職業教育との意圖が含まれており、また教育の本義から見ても、すべての人が少しでも多く、時代に適合した知識をもつのは望ましいことであるから、これの健全

な發達は慶賀すべきことである。しかしこれだけでは、大切なものを失なうおそれがある。それはしつけと修養との缺如である。思うに大型の集團教育には、知識の習得はあっても人間的な接觸が稀薄である。專門化した技術教育では、職業人の特技は習得できても、全人格的な教養は學べない。如何なる社會においても、人間は父母の間に產まれて家庭の中で生育する。そして身近かな父母・兄弟・友人等との人間的な接觸によってしつけられて、はじめて人間らしい意欲や感情や知性が、節度をもって發芽するのである。科學的な知識の開發も、職業的な技術の習得も、正しくしつけられた人間的素材があってこそ十分な偉力を發揮し得るのであり、それを缺いては人間の正常な發達は期し難い。だから家庭の大切なことは言うまでもなく、小規模な人間的接觸の場を荒蕪に歸せしめてはならない。それ等をおろそかにすることは、結局、人間性の芽を枯らすことになる。また既に社會に活動する成人にとっても、常に相互に切磋するための、隔意のない人間的な話し合いの場が必要なことは、上にのべた通りである。

「君子は德を懷ふ」。職業の如何を問わず、德に深い愛着をもってここに集う人は、みな我が同志である。私は今ここに、懷德堂記念會五十年の歩みを回顧して、いささか所感をのべて祝詞に代える次第である。